

本校の訪問教育

医療的ケア安全委員会

1 本校の訪問教育の実態と位置づけ

(1) 訪問生の実態

平成25年度の本校訪問生は小学部児童のみで、1年生女子、3年生男子、5年生男子3名です。3名とも知的障害、肢体不自由、病弱を併せ持つ重度重複障害児です。常時医療行為及び医療的ケアが必要であることから学校への通学が困難であり、訪問教育で教育保障を行っています。児童の実態に合わせて、担任が週2～3回、自立活動担当者が週1回、自宅に訪問して1～2時間授業をしています。

3人とも、日常生活のほとんどを仰臥位姿勢で過ごしているため、関節の拘縮が見られます。変形や側彎の進行防止とともに、緊張緩和や姿勢変換、適切な姿勢保持などを行って、呼吸状態の安定を図っています。

個々の児童の発信は微弱または微細ですが、目や口、指などの動き、表情の変化などを「サイン」としていねいにとらえて意味づけ、返していくことでコミュニケーションの相互作用が形成されつつあります。表面的には乳児期前半の発達課題を持つ子ども達に見えますが、内面の発達は乳児期後半～幼児期前半であると仮定しています。

1年生女子のAさんは、幼稚園の年中まで健常児として生活していました。5歳5ヶ月の時に原因不明の痙攣を起こし救急搬送され、それ以降、日常生活全般に介助を要する状態となりました。約1年後に退院して在宅生活を始め、4月に本校の小学部1年生として入学しました。週2回の訪問教育では、運動機能担当者と連携しながら、関節や筋肉の拘縮変形を防ぐことを重視しました。また、今までに培ってきた心身の力をもとに外界へ向かう力を広げていくために、大好きだった音楽やダンス、自然の草花を学習に取り入れるようにしました。フルーツ演奏や、お母さんが弾くピアノの音にじっと気持ちを向け、ツリーチャイムに触れた指を動かすこともありました。自然の草花などに触れる時には、指先に気持ちを集中させているようでした。しかし、7月に体調を崩して入院し、11月からは訪問先を病院に変更して学習を再開させました。訪問担当者が作った「Aちゃんのうた」は、家族も作詞に参加し、みんながAちゃんのことを思って歌う歌となりました。12月18日には、学部総括、担任、運動機能担当者、学校看護師と一緒に、

楽しくにぎやかな2学期の終業式をしました。

3学期の始業式に会うことを楽しみにしていましたが、12月25日に体調が急変し、永眠しました。



3年生男子のB君は進行性の筋疾患で、常時人工呼吸器を使用しています。3年生の1学期までは、心拍数が上昇して学習を中断することがありましたが、2学期以降は心拍数変動が少なくなり、学習に集中できるようになりました。表情筋が動きにくくなってきてはいますが、音楽にあわせて身体を揺らすと、表情が緩んで笑顔になります。また、iPadを活用したビデオレターで、訪問生同士や小学部Aグループの児童と間接的に交流することで、友だちへの意識が育ってきています。



5年生男子のC君は、今年度6回のスクーリングと1回の校外学習を実施しており、クラスの友だちや指導者だけでなく、他クラスや学部の友だち・教職員とも交流し、多

様な人が集まる「学校」への意識が強まっています（「3 実践報告」参照）。

(2) 集団編成

今年度は、訪問生3人で独立した1クラスとして編成し、1名で担任しました。「訪問生クラス」としたことで、共通の課題学習や活動を通して「訪問生同士」「訪問生の保護者同士」のつながりを深めることができましたが、生活年齢だけでなく生理的基盤や発達課題の差が大きいため、個々の児童に合わせた教材教具や学習の展開を3パターン作る必要がありました。

(3) 校内での位置づけ

訪問生は小学部Aグループに位置付き、スクーリングや行事の時にはAグループの一員として活動しました。また、訪問担任もAグループの教職員とともに実践研究を行いました。

校内組織としては医療的ケア安全委員会の中に訪問教育担任が位置付き、年3回の拡大訪問教育担当者会（各部総括、SSW、医療的ケア安全委員会、運動機能担当者及び小学部Aグループ担任、保健室）と併せて訪問生の実態と課題を全校で共有することができました。

また、夏休みを利用して訪問担任以外の教職員も家庭訪問をし、訪問生への理解を深めることができました。校内初任者研修会でも訪問教育の講座を設定し、夏休みに初任者研修の一環として訪問生宅へ家庭訪問をしました。11月以降は、2組の担任が週1回、5年生男子の訪問教育に同行できるようになりました。

訪問生の学習の様子は、訪問教育通信の毎週発行や校内掲示板への学習の様子や作品の掲示、授業公開時に訪問教育の様子をビデオで公開するなどして、校内外に積極的に発信し、理解を深めてもらうことに努めてきました。

2 教育目標と内容

(1) 教育目標と指導上の留意点

教育目標と指導上の留意点については、「小学部の教育課程・課題配列表」の訪問教育の項に掲載しています。

今年度は、指導上の留意点の⑥に記した「児童のねがいを探り、実現を図る」ことに重点をおき、保護者とともに個別の指導計画を作成してきました。

個別の教育支援計画や指導計画には教師や保護者の願い（ねらい・要求）は反映しやすいですが、当事者である子どもの「ねがひ（要望）」は十分反映されないことがあります。特に、意思表示しにくい子どもの「ねがひ」を探ることは困難です。しかし、保護者をはじめ、医療機関、居宅介護や在宅支援に関わる福祉行政関係者と共に子どもの

「ねがひ」を考えて共有し、実現に向けて連携することで、子どもの新たな意欲や興味関心が広がっていくのではないかと考えています。

(2) 指導体制

A：小学部1年生女子 週2回訪問（長島・野村・大木）
 B：小学部3年生男子 週2回訪問（長島・野村・前田）
 C：小学部5年生男子 週3回訪問（長島・野村・前田）
 ・前田、大木は自立活動（運動機能）担当として、各児童の訪問に週一回同行

(3) 教育活動と内容

具体的な学習内容については「小学部の教育課程・課題配列表」の訪問教育の項に掲載しています。

領域	授業名	ねらい・配慮事項
自立活動	運動機能	・身体機能の維持、呼吸機能の向上を目指す。
教科領域を合わせた指導	はじまりの会	・学習の始まりを感じ、期待感と見通しを持たせる。 ・呼名への応え方を観察し、返事として意味づける。 ・手遊びや揺らし遊びで心身のリラクセスを図る。 また、個々の児童に応じた課題設定（五感への働きかけや手指の活動）をし、繰り返し取り組む。 ・歌や自然の草花などで、季節を感じるようにする。
	課題学習	・個々の児童に応じた、からだや手指の活動、見たり聞いたりする活動などを総合的に取り入れる。 ・担任や家族との共感、コミュニケーションを通して、やりとりの力を育てる。 ・好きな活動を取り入れ、主体的に関わっていかうとする意欲を育てる。
	えがくつくる調理	・一定期間繰り返すことで、学習の流れの見通しが持て、期待感を持って臨めるようにする。 ・素材の色や形、質感、香りを感じ、調理後のそれらの変化も感じられるようにする。 ・道具を使って活動する経験をさせる。 ・家族のために作ることを楽しむ。
	おわりの会	・合奏の楽しさを感じる。 ・学習の振り返りをしながら、終わりを感ずる。
特別活動	行事	・担任以外の指導者と共に、学期や学年の区切りを感じる。 ・「いつもと違う」活動ができるように計画する。 ・児童の成長を、家族と共に喜び合う場とする。
	校外学習	・家庭や病院以外の場での活動を経験する。 （各児童の実態に合わせて実施）
	スクーリング	・学校の雰囲気を感じ、友だちや担任と共に活動する。 （各児童の実態に合わせて実施）

